

## キバネツノトンボの但馬地方からの記録

植田 義輔<sup>1)</sup>

### はじめに

キバネツノトンボ *Libelloides ramburi* (M'Lachlan, 1875) は草原に生息する昼行性のツノトンボで、成虫は春季に出現する。昔はどこにでも見られたようだが、現在では全国的に減少している種であり(丸山, 2016)、兵庫県版レッドデータブックにおいても A ランクに選定されている(兵庫県, 2012)。

筆者はこの度、キバネツノトンボの正式な記録がなかった兵庫県の但馬地方において、本種を採集・観察したので報告する。

### 文献による兵庫県におけるキバネツノトンボの記録

文献によると兵庫県ではキバネツノトンボは、摂津地方[川西市](松本, 1983)、東播磨地方[加東市・加西市・小野市](松本, 1983; 兵庫県, 2012; 徳平・高尾, 2013)、西播磨地方[姫路市・赤穂郡上郡町・赤穂市](兵庫県, 2012; 東, 2014)の3地方から記録されている。

### 但馬地方のキバネツノトンボについて

但馬地方ではキバネツノトンボは未記録であるが、過去に本種が目撃された事例があることが確認された。確認者の近藤伸一氏によると「1980年代にオオウラギンヒョウモンの調査で訪れた養父市(旧:養父郡関宮町)葛畑において本種1個体を捕獲したが、その場で放逐し、写真撮影等は行わなかった。」とのことである。

### 豊岡市でのキバネツノトンボの確認とその生息状況

筆者は、豊岡市日高町栗栖野(神鍋山)において、2016年と2017年に本種を採集・観察した。詳細について以下に記した。

#### 1) キバネツノトンボの生息環境—神鍋山の環境—

キバネツノトンボが確認された環境は、いずれも神鍋山の南側斜面のススキ草地である。ススキはやや密生して生育しており、本種の成虫が出現する5月下旬頃の草丈は1m程度であった。ススキ草地には、ススキの他にワラビ・ヨモギ・ヒメジョオン・ハギ類などが生育

している。

神鍋山(標高469m)は約2万5千年前にできた火山であり、少し離れたところから見ると、お椀を伏せたような形状である。現在の環境は、山の南側から東側斜面は、ススキが優占する高茎草本群落と、低茎草本や外来草本が生育するスキー場が広がっており、一方、西側から北側斜面はコナラが優占する落葉広葉樹林が成立している。このように神鍋山は草地とその周辺の樹林地がセットでみられる環境であるが(図1)、これは東(2014)が指摘する本種の生息環境(生息条件)「キバネツノトンボは図鑑の解説のとおり草地に生息しているが、ただ草地だけではだめなようで周囲に林が無いといけないようである」と一致している。

なお、神鍋山の西側に連なる妙見山から蘇武岳にかけての山地や北側の三川山などの山地では、ニホンジカ(以下、シカとする)の採食による森林の下層植生(低木・草本類など)の衰退が顕著であるが(近藤伸一氏私信)、神鍋山については、2017年時点ではシカの食痕が少数見られるものの、植生の衰退は認められなかった。これは神鍋山が周囲の山地から集落や耕作地を隔てて孤立していることや、神鍋山への侵入路に多数の罠を設置するなど豊岡市がシカの捕獲を積極的に進めているため、周辺地区よりもシカの生息密度が低く抑えられているものと推測される。



図1 生息地の環境(2016年6月4日撮影)。

<sup>1)</sup> Yoshisuke UEDA 大阪府枚方市



図2 キバネツノトンボ (1) イネ科草本の茎に静止 (2017年5月17日撮影).



図3 キバネツノトンボ (2) スイバの枯れた茎に静止 (2017年6月20日撮影).

## 2) キバネツノトンボの生息状況

当地で最初に本種を採集したのは2016年6月4日である。時刻は14:00頃、天候は曇りであり、1♀がススキ草地のヒメジョオン(イネ科)の茎に静止しているところを採集した。その後、確認地点の周辺を探索したが追加個体を確認することはできず、当地が本種の発生地となっているのか、一時的に飛来した個体が確認されただけなのかの確証が持てなかった。

本種が当地で継続して発生しているか否かを確認するために、翌年の2017年5月と6月に再度探索を実施した。その結果、5月17日にススキ草地において、イネ科草本の茎に静止していた1個体を撮影・採集(図2)し、それ以外にも2個体を観察することができた。さらに5月28日には、14:00頃にススキ草地の上、地表からは1.5~2mくらいの高さを活発に飛翔する本種を複数観察することができた。当時は晴天で気温も十分に高く、本種の活動に適した状況であると考えられた。飛翔個体の確認数は、筆者が2時間弱くらい観察した限りでは、合計5個体程度であった。最後に観察できたのは6月20日で、スイバの枯れた茎に静止していた1個体を撮影したほか(図3)、12:30頃に上空4~5mほどの高さを飛翔する3個体を確認した。

これらのことから、神鍋山は本種の生息地となっており、5月から6月にかけてススキ草地に成虫が出現することが確認された。ただし、草地の面積に比して当地での生息数はそれほど多いとは考えられず、今後は本種の生息状況の変化に注目していきたい。

## 謝辞

現地調査にご同行頂き、但馬地方における本種の観察事例をご教示頂いた近藤伸一氏(朝来市)、但馬地方における本種の記録の有無について教えて頂き、発表を勧めて頂いた八木剛氏(兵庫県立人と自然の博物館)、近藤伸一氏を介して本種の記録についてご教示頂いた相

坂耕作氏(姫路市)に厚くお礼申し上げる。

## 引用文献

- 東輝弥, 2014. キバネツノトンボ (*Ascalaphus ramburi* Maclachlan) 生息地の記録. きべりはむし, 37(1): 39-40.
- 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課(編), 2012. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2012 (昆虫類).
- 松本健嗣, 1983. キバネツノトンボ物語. きべりはむし, 11(1): 16-17.
- 丸山宗利, 2016. 裏山の昆虫誌 [Vol.15] キバネツノトンボ. 生物の科学 遺伝, 70(3): 209.
- 日本昆虫目録編集委員会(編), 2016. 日本昆虫目録 第5巻 脈翅目群, 長翅目, 隠翅目, 毛翅目, 撚翅目. 権歌書房, 福岡.
- 徳平拓朗・高尾海星, 2013. 加東市で採集された注目すべき昆虫. きべりはむし, 35(2): 24-27.